

## 原著者の追跡

### トマス・パーシーの編集方針

三原 穂

18世紀において、作品を捏造するような文学的偽装工作は決して珍しいことではなかった。1764年に出版されたホレス・ウォルポール(Horace Walpole)のゴシック小説『オトランド城』(*The Castle of Otranto*)の初版の序文には、この小説が旧教徒の古い家の書庫で発見された、オノフリオ・ミュラルト(Onuphrio Muralto)なる原著者の原典に基づくものであることが記されている。しかしながら、実際は、この小説はウォルポールみずからの想像力によって生み出された作品だったのである。1796年、『ヴオーティガンとロウィーナ』(*Vortigern and Rowena*)がシェイクスピアの未発表作として公演されたが、実はそれは当時まだ若干18歳の少年であったウィリアム・ヘンリ・アイアランド(William Henry Ireland)自身が創作したものであった。<sup>1</sup> さらに、当時の文学的偽装工作と結びつけられる文人として、トマス・チャタトン(Thomas Chatterton)とジェイムズ・マクファーソン(James Macpherson)を思い起こすことができる。両者の作品が当時の文壇に真贋論争を引き起こしたことは、あまりにも有名な話である。このような文学的偽装工作は当時の流行だったと言える。



現代的視点からすれば不正と判断されかねない手段を講じて原文に修正を施すこともまた一種の文学的偽装工作であると言えよう。18世紀の文人は、自分の作品のもとになるテキストが欠点だらけの不完全なものである場合、大なり小なりの修正を施して洗練されたものにしないかぎり世に出す価値はないと考えた。このような偽装工作の影響をうけて、本稿において中心にとりあげるトマス・パーシー(Thomas Percy)もまた、アイアランドやチャタトンら同様に、偽作者としてみなされる可能性がある。というのもパーシーは、彼が友人の家で偶然見つけたフォリオ写本(Folio Manuscript)<sup>2</sup>を種本にしたバラッド集『英国古謡拾遺集』

<sup>1</sup> 以上の具体例は次の種村季弘氏の著作に負う。『偽書作家列伝』(東京：学習研究社、2001) 76-124.

<sup>2</sup> この写本はPercy家によって長らく人目に触れられないようにされていたが、ヴィクトリア朝期に出版された。John W. Hales and Fredelick J. Furnivall, eds, *Bishop Percy's Folio Manuscript: Ballads and Romances*, 4 vols. (London: Trübner, 1868).

(*Reliques of Ancient English Poetry*)<sup>3</sup>において、その種本に基づくいくつかのバラッドに多くの修正を施しているからである。ウォルター・ジャクソン・ベイト(Walter Jackson Bate)は、パーシーもアイアランド、チャタトン、マクファーソンと同様に文学的偽装を行った文人の1人であることを示唆している。<sup>4</sup>しかしパーシーの場合、単純に偽装とは言えない面がある。パーシーはテキストに自由に手を加えて修正することを許した18世紀の時代精神に影響を受けつつも、それに矛盾する学究的性質をもっていたからである。本稿では、パーシーが、時代の要求した洗練さを重視する傾向よりは、むしろ真に学究的な特徴を強く示していたことを主張したい。

1

ウィリアム・シェンストン(William Shenstone)は、洗練さを重んじる高雅な詩人として尊重され、他の文人たちに助言や判断を求められた。当時の有力な出版者であったロバート・ドズリー(Robert Dodsley)もシェンストンの批評能力に敬意を表し、助言を求めた。<sup>5</sup>パーシーもドズリー同様にシェンストンに指示を仰いだ。パーシーは、『英国古謡拾遺集』の初版の序文で、シェンストンをこのバラッド集の編集における重要な協力者として説明している(*Reliques* 1: xii)。このことから、パーシーはシェンストンをよき指導者として頼りにしていたように



思われるが、パーシーがシェンストンの指示に対して必ずしも忠実ではなかったことが後の時代の学者たちによって指摘されている。その序文での記述は「不適切であり誤解を招くもの」であるとアーヴィング・チャーチル(Irving Churchill)は述べており、<sup>6</sup>リー・デニス(Leah Dennis)はパーシーをシェンストンの追従者としながらも、時にパーシーがシェンストンに背信行為を示したことを否定していない。<sup>7</sup>ニック・グルーム(Nick Groom)は、「シェンストンがパーシーにとって協力者であると同時に不快な存在でもあり、2人

<sup>3</sup> Thomas Percy, *Reliques of Ancient English Poetry: Consisting of Old Heroic Ballads, Songs, and Other Pieces of Our Earlier Poets, (Chiefly of the Lyric Kind.) Together with Some Few of Later Date*, 1st ed. 3 vols. (London: Dodsley, 1765). 本稿ではこの初版を使用する。

<sup>4</sup> Walter Jackson Bate, "Percy's Use of His Folio-Manuscript," *JEGP* 43 (1944): 337.

<sup>5</sup> James E. Tierney, ed., *The Correspondence of Robert Dodsley 1733-1764* (Cambridge: Cambridge UP, 1988) 19.

<sup>6</sup> Irving L. Churchill, "William Shenstone's Share in the Preparation of Percy's *Reliques*," *PMLA* 51 (1936): 960.

<sup>7</sup> Leah Dennis, "Thomas Percy: Antiquarian vs. Man of Taste," *PMLA* 57 (1942): 153.

の協力関係は確固たるものではなかった」と論じている。<sup>8</sup> ジャン・マリ・オミーラ(Jean Marie O'Meara)は、その博士論文の1章分をさいてシェンストンとパーシーの関係を論じているが、いくつかの証拠を挙げながら、パーシーがシェンストンの判断や指示を次第に信用しなくなっていたことを明らかにしている。<sup>9</sup> 以下に示す通り、このようなパーシーのシェンストンへの反発を、注釈をめぐる両者のやりとりに焦点をあてて考えると、パーシーの学究的性格が浮き彫りになってくるのである。

シェンストンは、原典への自由な修正に対して寛容な考えをパーシーに示している。1760年10月に書かれた、パーシーへの手紙の中で、シェンストンは、語単位の変更は「それを特に断わらなくても良心の問題とは関わらない」ものであり、行単位の変更については「その旨をほのめかしさえすれば問題はない」と主張して、修正を奨励している。<sup>10</sup> このような指示を与えたあと、シェンストンがパーシーに「あなたの読者になる人々を満足させないかもしれないことをあなたが容認してしまうのではないかと恐れている」と述べていることは注目に値する(Williams 562)。つまり、シェンストンは、読者の関心をひきつけてその好みに合致するように作品編集を行うべきだと考えていたことになる。このことはサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)にその文学的偽装工作を強く非難されたマクファーソンをシェンストンが評価していることによって裏付けられる。すなわち、シェンストンは1761年9月に書かれた、ジョン・マゴワン(John Macgowan)への手紙の中で、マクファーソンが彼の作品でみせた、当時の読者に受け入れられるように施された修正を認めているのである(Williams 596)。

このような助言を受けたにもかかわらず、パーシーはシェンストンの助言に必ずしも従おうとはしなかった。シェンストンが重視した読者の好みを意識しないで、パーシーは編集を行おうとしたことが次の手紙のやりとりからわかる。1760年9月に書かれたシェンストンへの手紙の中で、パーシーは、彼がそのとき編集していた『古代北欧の5つの詩篇』(*Five Pieces of Runic Poetry*)<sup>11</sup> が「多くの注で満たされているのをみれば読者は誰でもうんざりしてしまうかもしれない」というように、シェンストンから批判を受けることを予想しているが、その後で、「注がなければ作品の理解がさまたげられてしまう」と自らの注の導入を正当化している。<sup>12</sup> これに対してシェンストンは、上述の1760年10月のパー

<sup>8</sup> Nick Groom, *The Making of Percy's Reliques* (Oxford: Clarendon, 1999) 107.

<sup>9</sup> Jean Marie O'Meara, "Thomas Percy and the Making of the *Reliques of Ancient English Poetry*," diss., U of California, 1990, 130-61.

<sup>10</sup> Marjorie Williams, ed., *The Letters of William Shenstone* (Oxford: Blackwell, 1939) 562.

<sup>11</sup> Percy, *Five Pieces of Runic Poetry: Translated from the Islandic Language* (London: Dodsley, 1763).

<sup>12</sup> Cleanth Brooks, ed., *The Correspondence of Thomas Percy and William Shenstone*, *The Percy Letters* 7 (New Haven: Yale UP, 1977) 70.

シーへの手紙で、読者の好みに合わせる重要性を説いた直後、注は「行く手をさえぎる岩のようなものである」ため、『古代北欧の5つの詩篇』では「注はできるだけ短いものにされることが望ましい」と述べている(Williams 562)。この注に関するやりとりはパーシーとシェンストンの2人の関係だけに限定できない大きな問題である。

サイモン・ジャーヴィス(Simon Jarvis)は、18世紀の前半にリチャード・ベントリー(Richard Bentley)の緻密な文献学に基づく本文批評が強い抵抗を受けていたことを指摘している。<sup>13</sup> 当時、文献学は軽蔑され非難されていたのである。チャールズ・ボイル(Charles Boyle)は頁をさまざまな異本の提示や長く細かな注で満たすような文献学的手法を蔑み、ジョゼフ・アディソン(Joseph Addison)もボイルと意見を共有していた(Jarvis 28)。アレグザンダー・ポープ(Alexander Pope)も、アディソンらと同様に、注釈が頁を埋め尽くして、読者にとって不必要な多くの情報が与えられることに反発した(Jarvis 67)。読者を重視し、彼らの意向に沿うように指示を与えるシェンストンは、アディソン、ポープと同じ流れに属している。他方、パーシーは、長い注をつけることによって読者の読書意欲をそいでしまうとシェンストンやポープが判断するような編集をしようとしている点で、文献学者のベントリーとよく似た傾向を示していると言える。つまり、パーシーは、文献学の流れを受け継いで作品編集を行おうとしたのである。<sup>14</sup>

## 2

パーシーが友人の家で見つけたときには薪として燃やされそうになっていたフォリオ写本にはさまざまな古いバラッドが転写されていた。パーシーは、この写本から『英国古謡拾遺集』にバラッドをそのまま忠実に移さずに、多くの修正を加えて移していることはすでに述べた。約100年の時間が経過してヴィクトリア朝期となり、それまで門外不出の状態にされていたフォリオ写本が公開されると、フレデリック・ファーニヴァル(Frederick J. Furnivall)、ジョン・ヘイルズ(John W. Hales)が、パーシーによるバラッドの修正を厳しく非難した。20世紀に入ると、パーシーの編集方針が見直されるようになる。アルバート・フリードマン(Albert B. Friedman)は、ヴィクトリア朝期の批評を再考し、パーシーの修正が、18世紀後半の時代思潮に合わせるための、必要不可欠なものであり、パーシーの修正について考えるときには、彼の生きた時代の時代精神を考慮に

<sup>13</sup> Simon Jarvis, *Scholars and Gentlemen: Shakespearean Textual Criticism and Representations of Scholarly Labour, 1725-1765* (Oxford: Clarendon, 1995) 20-30.

<sup>14</sup> D. C. Greethamは次の論文集の序論で、学問的編集を詳しい注釈や異本提示と結びつけている。D. C. Greetham, ed., *Scholarly Editing: A Guide to Research* (New York: MLA, 1995) 1.

入れる必要があると主張した。<sup>15</sup> つまりパーシーはシェンストンの要求するような指示に従わざるをえなかったということになる。しかし、本稿ではパーシーの修正はそうした要求に応えるためになされたというよりは、彼の学究的性質からなされたものであったことを明らかにしたい。

フォリオ写本のバラッドの中には素朴な魅力をもっていたにもかかわらず、欠損部分の多い不完全な状態のものが含まれていた。それ故に、完全版にするために多くの修正が施されてフォリオ写本から『英国古謡拾遺集』へ移されたバラッド群が存在した。「サー・コーライン」(Sir Cauline)、「エルの子供」(The Child of Elle)、「サー・オールディング」(Sir Aldingar)、「リンの相続人」(The Heir of Linne)そして「サー・ガウェインの結婚」(The Marriage of Sir Gawaine)である。このうち「サー・コーライン」、「サー・オールディング」、「サー・ガウェインの結婚」の3つのバラッドに焦点をあてることで、パーシーのバラッド編集における最も主要な方針が明らかになると同時に、パーシーによるバラッド修正の全体像が簡潔に述べられることになる。<sup>16</sup>

まず「サー・コーライン」における巨人の描写の違いに注目したい。フォリオ写本では「力強い不屈な巨人は／今彼ら[王と王女]のいるところに駆け寄った。／巨人はその首の上に5つの頭をもち／この世のものに比べようもない姿であった」(130-33)<sup>17</sup>と描写されている。これに対して、『英国古謡拾遺集』では、「力強い不屈な巨人の／手足や顔はすっかり汚れ／ぎよろぎよろしたその目はかっとなえる炎のようで／口は耳から耳まで裂けていた。／巨人の前に現れたとても背の低い小人は／片ひざをついて待っていた。／小人は背中に5つの頭を担ぎ／すっかり気を落とし顔が青ざめていた」(2. 74-81)<sup>18</sup>というように、パーシーはフォリオ版の5つ頭の巨人を単数の頭の巨人に変えているが、そのかわり、巨人の目を燃える炎に喩え、口を耳から耳まで裂けさせて、フォリオ版には登場しない、巨人の従者と思われる小人を登場させ、その小人に死人の5つの首を担がせた結果、超自然的な要素をより多く盛り込んだことになる。「サー・オールディング」の場合は、オールディングと戦って勝利する、神秘的な存在として描かれる子供の描写に違いがある。フォリオ版では、「彼[使者]がある川のほとりを馬に乗って走っていると／幼

<sup>15</sup> Albert B. Friedman, *The Ballad Revival: Studies in the Influence of Popular on Sophisticated Poetry* (Chicago: U of Chicago P, 1961) 209. このFriedmanの意見を共有する学者を以下に挙げておく。Eileen Mackenzie, "Thomas Percy and Ballad 'Correctness'," *Review of English Studies* 21 (1945): 58-60. Zinnia Knapman, "A Reappraisal of Percy's Editing," *Folk Music Journal* 5 (1986): 202-03. Gwendolyn A. Morgan, "Percy, the Antiquarians, the Ballad, and the Middle Ages," *Medievalism in England II*, ed. Leslie J. Workman and Kathleen Verduin, *Studies in Medievalism* 7 (Cambridge: Brewer, 1995) 26.

<sup>16</sup> これらのバラッドのフォリオ版とPercyによる修正版との比較によってえられた、以下に示される結果については、次の拙稿においてすでに指摘されている。Minoru Mihara, "Percy's *Reliques*: A Reminder of the Oral Tradition of Scalds and Minstrels," *Colloquia* 19 (1998): 131-40.

<sup>17</sup> *Folio Manuscript*, vol. 3, 11.

<sup>18</sup> *Reliques*, vol. 1, 47-48.

い子供に出会った。／その子供の背格好はみため／わずか4歳ほどであった」(107-10)<sup>19</sup> というように子供の服装への言及はなされていない。しかし『英国古謡拾遺集』に登場する子供は「黄金の外套で全身を包み／その背格好はみため／わずか4歳ほどであった」(122-24)<sup>20</sup> といった具合に、黄金の外套を身につけているために、神秘的な印象をその分強く読者に与えている。「サー・ガウェインの結婚」では棍棒をもった登場人物の描写に違いがある。パーシーはフォリオ版の「そこで私が出会ったある豪胆な男爵は／大きな棍棒を背負って／勇ましく立っていた」(33-35)<sup>21</sup>という平凡な描写に満足せず、『英国古謡拾遺集』で「その騎士は普通の人倍背があつて／筋骨隆々としてたくましく／背負った棍棒は／太くかつ長い」(29-32)<sup>22</sup>というように書きかえ、棍棒をもった人物を普通の人間の2倍の背の高さにすることで、フォリオ版よりも奇想天外な内容の物語にしようとしている。

以上の修正は、完全な原始のかたちを提示できていない不完全なフォリオ版をもとに、古代中世の吟遊詩人が歌っていたと想定される理想のバラッドをできるだけ正確に再現しようとするパーシーの学究的な意図と関わりをもつ。<sup>23</sup> つまり、パーシーは上述したような超自然的な要素を導入することによって、自分の編集するバラッドを吟遊詩人のつくったその原作品に近づけようとしているのである。というのも『英国古謡拾遺集』に収められた論文「韻文ロマンスについて」(‘On the Ancient Metrical Romances’)の中でパーシーは、バラッドの原著者である古代中世の吟遊詩人たちが「巨人や小人の存在を信じていた」だけでなく、「龍や怪物との戦いを好んで歌にした」ことを指摘して、吟遊詩人の超自然的なものへの愛着から、いかにして彼らが非現実的な内容のバラッドをつくり歌っていたかを説明しているからである(*Reliques* 3: iv)。この論文でパーシーは、古代中世の吟遊詩人の歌い方に関する仮説を提示し、その仮説を自らのバラッド修正で実践し例証してみせているということができる。つまり、パーシーは吟遊詩人流に歌っているのである。

このパーシーの表現手法は、マークス・ウォルシュ(Marcus Walsh)やピーター・シリングズバーグ(Peter Shillingsburg)が言うところの、「原著者を重視する方針」(‘authorial

<sup>19</sup> *Folio Manuscript*, vol. 1, 170.

<sup>20</sup> *Reliques*, vol. 2, 53. O'Mearaも、その博士論文の中で、Percyがこの子供の超自然的性質を強めている節があることを指摘しているが、残念ながら具体的な言及はなされていない。O'Meara 252-53.

<sup>21</sup> *Folio Manuscript*, vol. 1, 108.

<sup>22</sup> *Reliques*, vol. 3, 12.

<sup>23</sup> Greethamは、学問的編集が原著者の意識にせまろうとする試みと関わるものであり、学問的編集者がテキストの起源に関心をもつことを指摘している。学問的編集はいわばテキストの考古学だと言っているわけである。*Scholarly Editing* 2-6.

orientation”)に基づくものである。<sup>24</sup> この方針は原著者の意図を復興することをめざすものである。この方針に基づいて編集を行った編集者としてルイス・ティボルド(Lewis Theobald)やエドワード・ケイペル(Edward Capell)を挙げることができる(Walsh, *Shakespeare* 198)。18世紀の編集においては、しだいにこの方針が、ポープやウィリアム・ウォーバトン(William Warburton)にみられる、洗練さを重視する読者本位の「美的方針」(“aesthetic orientation”)にとってかわり(Walsh, *Shakespeare* 114)、新書誌学を提唱したウォルター・ウィルソン・グレグ(Walter Wilson Greg)やフレッドソン・バウアーズ(Fredson Bowers)やトマス・タンセル(Thomas Tanselle)といった20世紀の学者たちへと受け継がれていったのである(Walsh, *Shakespeare* 9-10)。この方針は、「推測による修正」(“conjectural emendation”)を必要とするものであり、タンセルは編集者が「推測による修正」を加えた版こそが原著者の意図したテキストに最も近いものになると主張している(Walsh, *Shakespeare* 15-16)。パーシーも「推測による修正」に頼ってバラッドの原形を復元しようとしたのである。

「サー・コーライン」、「サー・オールディング」そして「サー・ガウエインの結婚」のそれぞれのフォリオ版は不完全であり、原形の完全なかたちを提示できていなかったため、パーシーは「推測による修正」によってこれら不完全版を完全版にして、バラッドの生みの親である古代中世の吟遊詩人のつくったバラッドを復興しようとした。このことは、「サー・オールディング」の頭注において、パーシーが「推測による修正」によってこのバラッドを編集したことを認めていることから明らかである(*Reliques* 2: 48)。しかし、「推測による修正」が行われる前に、できる限り多くの証拠資料やバラッドの異版を集め、それから異本照合を重ねて原形にさかのぼろうとするパーシーの学究的な努力がなされていたのである。<sup>25</sup> それは「エルの子供」の頭注で、「原作の感動的な素朴さや飾らない美を模倣することがいかに難しいかを理解してくれれば、読者は[このバラッドへの書き加えを]大目に見てくれるだろう」と述べていることから明らかである(*Reliques* 1: 90)。根拠に基づくことなく、自らの自由な推測に頼っていれば、このように原形を模倣するのが難しいという判断はなされなかったであろう。証拠に基づいているからこそ原形の復興に拘束が生じ、気まぐれな推測や想像によって原形を復興することが妨げられたわけである。パーシーは、証拠に基づく「推測による修正」によって、できる限り正確にバラッドの原形を復興しようとしたと考えられる。このことは次に扱う、文学作品の生み出された時代背景を

<sup>24</sup> Marcus Walsh, *Shakespeare, Milton, and Eighteenth-Century Literary Editing: The Beginnings of Interpretative Scholarship* (Cambridge: Cambridge UP, 1997) 9. Peter L. Shillingsburg, *Scholarly Editing in the Computer Age: Theory and Practice* (Athens: U of Georgia P, 1986) 24.

<sup>25</sup> Percyによる資料の徹底的な調査と入念なテキスト照合についてはIrving Churchillによって指摘されている。Churchill, “Thomas Percy, Scholar,” *The Age of Johnson*, ed., Frederick W. Hilles (New Haven: Yale UP, 1964) 93.

明らかにして編集上の問題を解決しようとする態度と関わり合いをもってくる。

3

18世紀の編集者がしだいに文学作品をそれが出版された時代の文脈の中で理解するべきだと考えるようになったことを指摘したうえで、ウォルシュは、そのような考えを支持した編集者としてティボルドとジョンソンそしてケイペルを挙げている。<sup>26</sup> ティボルドは彼のシェイクスピア作品編集の1733年版の序文で、編集者は自分が編集する作品が生み出された時代の歴史や風習に精通することが必要であると主張した。<sup>27</sup> ジョンソンもシェイクスピアの作品をその同時代の作品と比較することで、シェイクスピアの使っているわかりづらい表現や語の意味が解明されうると説明した。<sup>28</sup> このような努力を最も重視したのがエドモンド・マローンであった。彼が徹底してシェイクスピアの生きた時代の資料を集めていたことが、1793年9月21日に書かれた、マローンのパーシーへの手紙からわかる。<sup>29</sup> マローンは、シェイクスピアの意図を復活させ、「シェイクスピアの語法や言葉づかいをその同時代人のものと比較して説明すること」を自らのシェイクスピア作品編集における目的にした。<sup>30</sup> マローンは、忘れられてしまった当時の習慣や廃れてしまった当時の語法を解明できることを期待して、当時の資料をくまなく入念に調査したのである。<sup>31</sup> このようなマローンの学究的な態度についてはマーグリータ・ドゥ・グラツィア(Margreta de Grazia)が論じている。グラツィアが強調していることは、マローン以前の編集者が自らの理解不足のためにシェイクスピアの欠点とみなして排除していたものを、マローンはシェイクスピアの同時代人の残した作品や文書を調査して、それが決して欠陥ではなく、むしろその時代の特徴であることを示した、ということである。<sup>32</sup> 以上のような、作品の生み出された時代背景を重視する態度をパーシーも表していたことが、パーシーのローリー論争への関わりからわかる。

<sup>26</sup> Walsh, "Eighteenth-Century Editing, 'Appropriation,' and Interpretation," *Shakespeare Survey* 51 (1998): 135-36. 以下のTheobaldとJohnsonの例はWalshがとりあげているものである。

<sup>27</sup> Lewis Theobald, ed., *The Works of Shakespeare*, vol. 1 (London: Tonson, 1733) xlv-xlvi.

<sup>28</sup> Arthur Sherbo, ed., *Johnson on Shakespeare*, vol. 1 (New Haven: Yale UP, 1968) 56.

<sup>29</sup> Arthur Tillotson, *The Correspondence of Thomas Percy and Edmond Malone*, The Percy Letters 1 (Louisiana: Louisiana State UP, 1944) 60.

<sup>30</sup> Edmond Malone, ed., *The Plays and Poems of William Shakspeare*, vol. 1 (London: Rivington, 1790) lvi.

<sup>31</sup> Edmond Malone and James Boswell, eds., *The Plays and Poems of William Shakespeare*, vol. 2 (London: Rivington, 1821) 289.

<sup>32</sup> Margreta de Grazia, *Shakespeare Verbatim: The Reproduction of Authenticity and the 1790 Apparatus* (Oxford: Clarendon, 1991) 112-16.

パーシーが1773年9月6日にデイカー卿(Lord Dacre)に宛てた手紙の中には重要な箇所が存在する。<sup>33</sup>チャタトンによって15世紀の修道僧トマス・ローリー(Thomas Rowley)作として発表された詩群のもとになったとされていた写本の貸し出しを許されたデイカー卿は、この写本の調査をパーシーに依頼した。パーシーはその手紙の中で、調査報告を行い、この写本が明らかな偽物であることを宣言している。パーシーは、写本に見出された以下の欠点を根拠にして、偽物だと判定しているわけである。その欠点は、15世紀のものと食い違いを見せる句読法や文字の使い方といった欠陥のみならず、写本に書かれた内容が歴史的事実に矛盾するというところにまで及んでいる(Watkin-Jones 773-74)。この手紙から、証拠に基づかない推測によって写本が捏造されていることに対するパーシーの非難を読みとることができる。これは、チャタトンとは対照的に、パーシーがその学究的性質から、根拠に基づいた正確な情報を提供することの必要性を強く感じていたことを意味している。つまり、この手紙は、ティボルド、ジョンソン、ケイペル、マローンと同じように、パーシーが作品の生み出された時代の文脈の中で作品を理解しようとしていたことを示しているのである。

4

パーシーが作品を編集する際に意識していたのは、作品を読むことになる読者の好みというよりはむしろ、作品を生み出した原著者の意図であった。パーシーが読者の意向をあまり重視していなかったことは、文献学者による本文批評の流れを受け継ぎ、長い注をつけてシェンストンにその見直しをせまられたことから明らかである。逆に、パーシーが原著者の意図を重視していたことは、当時「美的方針」にとってかわりつつあった「原著者を重視する方針」を採用して、証拠に基づく推測に頼ってバラッドを修正したことから理解できる。さらに、編集する作品を編集者自身の時代の視点からではなく、作品の成立した時代の文脈の中で理解しようとする歴史的批評をパーシーが展開したことも、読者よりもむしろ原著者を意識していたことの証左である。このような態度はまさに学究的であると言える。パーシーと同時代の文学者ジョゼフ・リトソン (Joseph Ritson) は、パーシーのバラッド編集を皮肉って、パーシーは「バラッド詩人としては賞賛に値するが、それと同じくらいに、編集者としては痛烈な非難を受けるに値する」と述べているが、<sup>34</sup>こ

<sup>33</sup> この手紙の全文は、A. Watkin-Jonesの次の論文において初めて公開された。“Bishop Percy, Thomas Warton, and Chatterton’s Rowley Poems (1773-1790),” *PMLA* 50 (1935): 769-84.

<sup>34</sup> Joseph Ritson, *A Select Collection of English Songs*, vol. 3 (London: Johnson, 1783) n. pag. 1768年から71年に刊行された*Encyclopaedia Britannica*では、editorは“a person of learning”と定義されている。この定義が示しているように、編集者を学者と同義として考えると、RitsonはPercyがバラッド編集において学者的役割を果たしていないことを非難したと解釈できる。

れまでの議論から明らかなように、事実はこのリトソンの言葉に矛盾するのである。パーシーは高雅な詩人シェンストンを遠ざけて「美的方針」からはなれて「原著者を重視する方針」に基づく学問的編集を行った。パーシーはティボルドからケイペル、ジョンソンへと続くこの学問的編集の系譜を自らも受け継ぎ、その発展にバラッド編集の面で貢献したのである。さらにその系譜は20世紀の新書誌学派にまで及んだことを考えると、バラッド編集の立場からパーシーは新しい潮流の出発点としての印をつけたと言える。

(大阪大学大学院生)

本稿は18世紀英文学研究会(2002年7月20日、同志社大学)における発表原稿を加筆・修正したものである。

[『イギリスロマン派研究』28(2004年3月)掲載の初出論文に加筆訂正; イギリス・ロマン派学会より転載許可]